

平成 23 年度 北海道国語教育連盟

夏の研究交流学習会 発表資料

新学習指導要領の趣旨を生か した授業づくりのポイント

北海道教育大学附属札幌中学校
教諭 上田 浩嗣

1 これからの授業づくりのポイント

「言語活動を通して、指導事項を指導する。」という意識をもつ。

(例)「話すこと・聞くこと」の1年生

「スピーチをしようと思うので、まずは材料を考えましょう。」

「地域の小学校6年生とその保護者に、この学校のこと(日常生活の話題について)をわかってもらうためにスピーチ(紹介)をすることになりました。」

単元(授業)のスタートに生徒に提示する

単元(授業)の目指しているところ = 言語活動 = 生徒にとっての単元の目的意識・目標
(××のために をする。)

「地域の人に、この学校のことをわかってもらうためにスピーチを考えよう」

そのためには、何を話したらよいのか材料を集めて吟味しなければいけない。(ア)

相手にわかってもらうために順番に気をつけたり、年が違う人だから言葉遣いにも気をつけよう。(イ)

聞いてくれている人の反応を確かめながら、(修正を図りながら)話をしよう。(イ)

聞いてくれている人がわかるようなスピードや音量で話をしよう。(ウ)

本番前のリハーサルをしよう

目標に向かっているのかアドバイスをするために互いに聞き合おう。(エ、オ)

「スピーチをする」
(振り返る)

上記のような授業を考えた場合、生徒は指導事項を学ぶ必然性が生まれる。また、進んで学ぶことにつながる。(学習意欲)

= 「言語活動を通して、指導事項を指導する」ことになる。

このような授業を構成するときに注意しなければならないこととして

生徒が指導事項を意識できるようにする。そのためには、見通しをもたせる必要がある。また、振

り返りを求める必要がある。

「地域の人に学校を紹介するためのスピーチを成功させるためには、こんな力が必要だと思う。だから、これからの授業（単元）でこんなことをする必要がある。または、していきたい。」（教師の願い、生徒の想い）

「（全体を通して を目指しているので）今日は材料を考えるための方法として、こんなことを学びます。」

「今日の授業を通して、何を学びましたか？」

「今日の授業を通して、どれくらい目的に近づきましたか？」

生徒が意欲的に取り組めるような活動を設定する。

社会生活が意識できる（つながる）もの

「今これを学んでいることは、社会で必要とされている。」

「実の場」が設定されているもの

「これを学ぶことが、（実の場に）必要だ。」

「自分がやらなければならない」という意識（仲間とのかかわり・責任感）がもてるもの

この授業の目的・目標となるもの。道筋を示すことができるもの。（何のためにやっているのだろう？これから何をするのだろう？）

2 言語活動について

指導要領では「社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、鑑賞、批評などの言語活動を具体的に例示している。学校や生徒の実態に応じて様々な言語活動を工夫し、その充実を図っていくことが重要である。なお、例示のため、これらのすべてを行わなければならないものではなく、それ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。」とあるように、それ以外の言語活動が考えられる余地があることが示されている。

では、例示されているもの以外で言語活動となり得るものには、何があるのだろうか。

正直、指導要領に掲載されているもので言語活動は網羅されていると思えるのだが、その他の言語活動を考えるとしたら、その条件となるものは以下のようなものになるのではないだろうか。

その活動を通すことによって指導事項が指導できるもの

なるべく（自分以外の誰か）相手を必要とするもの

「××のために をする。」の「××」に他者が入ることによって「 」に入る言語活動が活性化する。

日常生活や社会生活に必要となるもの

3 実践例

授業の概略

第3学年の「読むこと」「おくのほそ道」を用いた授業である。

主に指導したいこととしては、表現上の工夫や文章、展開や場面について読み取ることが内容理解を深めるということを理解し、それができるようになること（指導事項ア、イ）と、歴史的背景などに注

意して古典を読み、その世界に親しむこと（伝統的な言語文化ア）である。

設定した言語活動としては、「批評文」を書くというものであった。

授業の詳細

「おくのほそ道」を読むために「批評文」を書くという言語活動を最初に設定した。批評するためには、作品のよさや特性、価値を感じる必要があることを生徒とともに確認する。そこで、作品のもっている価値を生徒が感じるための学習活動として「ツイッター」を考えた。これは「もしも、芭蕉の時代にツイッターがあったとしたら、芭蕉はどのようにつぶやくだろうか」という課題で、文章を読み、内容に合わせた形でツイッターのタイムラインを書いていくというものだった。（資料 ）

7月28日に行われた研究大会では、生徒が各自作成したタイムラインを交流しながら、芭蕉のしているものやそこから感じていることを読み取っていく授業を公開した。（資料 ）

ツイッターについて

ツイッターとは、情報を発信するサービスで「Twitter, Inc」が運営している、いわば商品名である。アメリカで始まったサービスで、一つのメッセージが140字以内と短いことから、英語で「とりのさえずり」を意味する「Twitter」(ツイッター)という名前がついた。そこに寄せられるメッセージを「tweet」(ツイート)とよび、日本では「つぶやき」と訳されることが多い。

ツイッターは、自分が考えたことや感じたことを、短い言葉ですぐにネットの上に広められる利点がある。即時性、速報性という点で、考えたことや感じたことがリアルタイムに、時間に沿って簡潔に述べられるところが特徴である。

もう一つ、ツイッターには「フォロー」という機能があり、他の人を自分の画面に追加することができる。お互いに相手のことをフォローし合うと、場所が離れている相手とも会話のようにつぶやきをつなげていくことができることになり、このようにつぶやきをつなげてできた一連の画面上の流れのことを「タイムライン」という。

この授業では、ツイッターの特徴を踏まえ、それを用いて「おくのほそ道」を読むことで、生徒がより楽しく、より積極的に、自ら進んで読み取りを進めると考えた。その中で生徒は自然と芭蕉の心情を想像し、その気持ちに寄り添うと考えた。

気をつけたいことは、ツイッターはあくまでも読むための手段であり、それを作成すること自体が目的ではないということ。この授業の目的は、あくまで「おくのほそ道」を読み、そこに描かれた情景やそこに表れている芭蕉の心情を読み取ることである。

では、なぜツイッターなのか。

この「おくのほそ道」は紀行文なので、芭蕉がその場所場所で見たものや、したこと、感じたことをあたかもそこにいて書き表したかのように書いている。（実際のところは違うのだが）それは先ほどのツイッターの特徴の即時性、速報性という観点を生かしやすい文章である。

そしてフォローをしている人と会話ができるといったツイッターの特徴についても生かせると考えた。誰かと芭蕉の仮想の会話を考えさせることで、生徒は自然と芭蕉のしているものを読み取ったり、置かれている状況について考えたり、そのときの心情を想像することにつながると考えた。また、そのフォローをしている人の中に、現代に生きる自分を入れることで、現代の価値観と昔の価値観の共通点や相違点についても生徒が考えるだろうと予想した。

なにより、江戸時代に書かれた作品を、自分の身近な世界に自然と引きつけてくれるものになると考え、ツイッターという手段を「おくのほそ道」の読み取りに用いてみることにした。

この授業では、「ツイッター」を作成する条件として、現代からの視点も交えて良いこととした。それによって、今は当たり前前のことでも昔は違うことや、今も昔も変わらない普遍的なことを、中学生なりに感じることに繋がると考えたからである。また、「ツイッター」を作成することは、先述したように江戸時代に書かれた作品を、自分の身近な世界に自然と引きつけてくれるものになると考えた。「ツイッター」を作成することは、生徒が自然と「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」になるだろうと考えた。(資料)

授業を終えての反省

研究大会での授業は終わったのだが、まだ、単元としては終わっていない段階の反省である。ただし、研究大会を終えて、様々な人から質問をいただいたり、ご意見をいただいたことをもとに、また、このような機会をいただいて、自分の実践を整理してみたことから考えたことをまとめてみた。

「批評文」という言語活動について

「おくのほそ道」を読むために「批評文」を書くという言語活動を設定した。(第 3 学年の言語活動例の「ア 物語や小説を読んで批評すること」をもとに考えた。)

しかし、この言語活動の設定には、工夫がなく、他者を必要とする意識にかける言語活動だったため、生徒の意欲を喚起することには至らず、生徒の読むことの推進力にはつながらなかったととらえている。そのため、ツイッターという学習活動に頼ってしまった部分が否めない。

では、どのようにすればよかったのだろうか。

「読むこと」の言語活動において、「読んで批評する」という要素が活動として入ることがポイントではないだろうか。

つまり、生徒が向かいやすく、必然性をもって他者への発信を伴うような活動であれば、生徒も意欲的に取り組めて、なおかつ、結果として批評する(作品のよさや特性、価値などについて、論じたり、評価したりする)ことが含まれる活動を考えることが必要だったということである。

例えば、「旅を終えた芭蕉と未来の自分との架空対談を文章にしてみんなに読んでもらおう」というように、具体的な姿を示すことが大切ではなかったかと考えている。

ツイッターという学習活動について

では、ツイッターを作成する学習活動は、言語活動だったのか。これは否である。

もし仮に、ツイッターを作成することを言語活動とするのであれば、その作成の過程で指導事項を指導できるものでなければならなかった。しかし、残念ながら、ツイッターを作成することは、指導事項をすべて指導できるものにはなっていなかった。

ツイッターを作成することで指導できる事項

生徒は、文章のよく読み、場面の展開や登場人物の位置関係や当時置かれた状況を意欲的に読むことにつながった。(ア、イ)

芭蕉の置かれている状況をさらに詳しく知るために、資料集や関連図書を進んで読むことにもつな

がった。(オ)

- × 文章の展開を評価することには直接は結びつかない(ウ)
- × 文章を読んで、自分の意見をもつことにはなるのだが、ツイッターにそれが直接表れる生徒とそうではない生徒がいた。(エ)

ツイッター作成を言語活動までにすることを考えるのであれば、作成するための条件設定を考えて、自分の考えや文章の評価をツイッター上に表れるような工夫をすることが必要であった。また、言語活動の条件として考えた、相手を必要とする活動、他者への発信を必要とされるような活動にする必要があった。

ツイッターを作成することは、書き換え、もしくは編集、要約という活動になる。これらの活動は社会生活の中で形を変えて必要とされるものとなるのだが、ツイッターを作成することと形が違いすぎて直接結びつくものではない。また、誰のために書き換えをしているのか、そこに他者が存在していなかったことも課題である。最初から、3人グループで役割を与えて、グループでツイッターのタイムラインを完成させることを目標にすると、今回の実践より他者が意識できたかもしれない。

4 まとめ

これからの授業づくりのポイントとしては、

「言語活動を通して、指導事項を指導する。」という意識をもつ。

新しい言語活動を考えて、実践していく。